

第 5 章

横須賀市の中学校における交流及び共同学習の充実

I. 背景と目的

II. 方法

III. 横須賀市における交流及び共同学習の現状と課題の事整理前

IV. 質問紙調査

V. インタビュー調査

VI. まとめと考察

章末資料

①横須賀市中学校特別支援学級を対象とした交流及び共同学習に関する質問紙調査

②インタビュー調査 質問項目

I. 背景と目的

共生社会の形成に向けて、教育の分野では、特別支援教育の推進を通して、インクルーシブ教育システムの構築が進められている。

特別支援教育において大切な視点は、児童生徒一人一人の障害の状態等により、学習上又は生活上の困難が異なることに十分留意し、個々の児童生徒の課題に応じた指導内容や指導方法の工夫を検討し、適切な指導を行うことである。

横須賀市教育委員会では、インクルーシブ教育システムの構築に向けて、平成 26 年度に前後期 8 年間を見据えた「横須賀市支援教育推進プラン」を策定し、子ども一人一人の教育的ニーズに的確に応える指導を提供する多様で柔軟な仕組みづくりを進めている。

この「横須賀市支援教育推進プラン」を踏まえ、各学校においては、校長のリーダーシップの下、学校がチームとして機能すること、支援教育に関する校内委員会、支援教育コーディネーターによって、校内体制の確立等を進めることで、支援教育の推進を図っているところである。

一方で、横須賀市の各学校は、様々な課題が複雑化・困難化しており、その対応が求められている状況にある。

これらのことから、横須賀市教育委員会では、各学校における支援教育の推進に係る取組として、校内の教育支援体制をより充実させ、課題に対応し、児童生徒一人一人に対して適切な指導が実現できる多様な教育的ニーズのある子どもの学びを保障する学校づくりを推進することとした。

横須賀市教育委員会は、多様な教育的ニーズのある子どもの学びを保障する学校づくりに向け、国立特別支援教育総合研究所の地域実践研究の事業に参画し、研究を進めてきた。昨年度、一昨年度の地域実践研究においては、横須賀市立小・中学校 69 校の支援教育コーディネーターを対象に質問紙調査を行った。その結果、横須賀市の学校では学校長のリーダーシップのもと、支援教育コーディネーターを中心に、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーなどの専門職との連携を進めるとともに、校内の教職員がチームとして組織的に対応している現状が明らかとなった。

一方で、インクルーシブ教育システムを構築し、多様な教育的ニーズのある子どもの学びを保障する学校づくりを進めるためには、交流及び共同学習の充実が不可欠であるが、現場では十分な対応がなされているとは言い難いとの声が上がっている現状にある。

例えば、横須賀市の中学校に設置されている特別支援学級の中には、「学習内容が難しくなる」、「定期テスト等を含めた評価・評定の課題」等の理由から中学校では交流及び共同学習の機会が減少し、特別支援学級での学習が中心となっている学校もある。特別支援学級に在籍する生徒の進路先が多様化している背景から、すべての教科の交流を希望する生徒が増えているなど、それに伴う課題も表面化してきている学校もある。また、特別支援学級からインクルーシブ教育実践推進校（「付記」参照）への進学を希望する生徒が今後も増えていくことを考慮する必要もある。

加えて、横須賀市の特別支援学級の担任は、臨時採用職員や非常勤職員など経験の乏しい教員が多くを占めており、毎年のように担任が入れ替わることも少なくない。

これらのことから、交流及び共同学習の充実に向け、中学校での交流及び共同学習について課題点を明確にし、交流及び共同学習の充実を図っていくことが急務であるという考えに至った。

そこで、本研究では、横須賀市 23 校の中学校特別支援学級における交流及び共同学習の実態を明らかにすることとした。また、各校の交流及び共同学習の現状から見えてきた課題を分析し、交流及び共同学習を充実させていくための具体的方策について情報を収集することを目的とした。

本研究を通して、横須賀市における中学校の現状や生徒の実態を踏まえた、多様で柔軟な交流及び共同学習の在り方を提示し、生徒本人及び保護者のニーズに寄り添った交流及び共同学習の実現に繋げていきたい。

Ⅱ．方法

1．横須賀市における交流及び共同学習の現状と課題の事前整理

質問紙調査、インタビュー調査をするにあたって、横須賀市における交流及び共同学習の現状と課題を、地域実践研究「交流及び共同学習」チームの地域実践研究員を含むメンバーで事前に意見を出し合い、整理した。

2．質問紙調査

横須賀市の中学校における交流及び共同学習に関する現状と工夫点について明らかにすることを目的として、横須賀市の全ての中学校 23 校において、リーダー的役割を担っている特別支援学級担任 23 名を対象に質問紙調査を行った。

質問紙調査では、横須賀市全 23 校の中学校特別支援学級における交流及び共同学習の実態を明らかにするとともに、各校の交流及び共同学習の現状から見えてきた課題を分析し、交流及び共同学習を充実させていくための具体的方策について事例を収集した。

3．インタビュー調査

質問紙調査の結果から交流及び共同学習について特徴のある取組をしている学校を抽出し、インタビュー調査の同意の得られた横須賀市の中学校（3 校）を対象に、学校長及び特別支援学級担任への聞き取りを行った。

インタビュー調査では、交流及び共同学習を充実させていくための具体的方策について情報を収集した。

4. 結果のまとめ

質問紙調査とインタビュー調査の結果をまとめ、横須賀市における交流及び共同学習について、現状を整理し、交流及び共同学習の充実に必要なことについてまとめ、今後の横須賀市における方向性を提示する。

Ⅲ. 横須賀市における交流及び共同学習の現状と課題の 事前整理

1. 横須賀市における交流及び共同学習の現状と課題の事前整理の目的

質問紙調査、インタビュー調査の項目を検討するにあたって、横須賀市の中学校における交流及び共同学習に関する現状と課題について考えられることを事前に整理することを目的とした。

2. 横須賀市における交流及び共同学習の現状と課題の事前整理の方法

横須賀市の中学校における交流及び共同学習に関する現状と課題について、地域実践研究「交流及び共同学習」の地域実践研究員を含むメンバーで意見を出し合い、整理した。

3. 横須賀市における交流及び共同学習の現状と課題の事前整理の結果

(1) 教育課程について

- ・教育課程について、前年度を踏襲する傾向が強く、生徒一人一人の学びについて考えた時に、生徒のためになっているかといった視点が薄いのではないかという危惧がある。交流及び共同学習の実態を調べるにあたって、ケースを丁寧に見ていく必要がある。
- ・交流及び共同学習といっても様々なバリエーションがある。例えば、教科の学習に参加できる生徒は、比較的支援が少なく済む生徒が多い傾向があるのではないか。一方、手厚い支援が必要な生徒の場合、行事等が中心となるのではないか。また、音楽や体育のみ（行事等に関連のある音楽や体育）、総合的な学習の時間で、交流及び共同学習を行っているケースも多い。技能4教科（音・美・体・技家）を交流及び共同学習、5教科（国・社・数・理・英）を特別支援学級というケースも多いのではないか。
- ・特別支援学級では、1対1での学習、少人数グループでの学習等の体制がある。日課表の組み方が複雑で、困っている現場が多いのではないか。
- ・特別支援学級では、学級ごと（知的障害、自閉症・情緒障害、肢体不自由など）に基本の時間割を作成している。その基本の時間割にそれぞれの交流及び共同学習の授業が組み

込まれ、一人一人の時間割が決まっていく。教員の出張等で交流学級の時間割が変更になることに伴い、当日や前日に急にその変更が伝えられるということもあるのではないかな。

- ・自閉症・情緒障害学級の生徒も一部、特別支援学校知的障害教育の教育課程（各教科）を使い指導している現状が多いのではないかな。

（２）進路について

- ・進学先や将来の生活を考えた時、交流及び共同学習の充実が大切となるが、生徒本人が自分と周囲との違いを自覚する等、自己理解を深め、周囲の助言や支援に素直に応じられるスキルを身に付ける指導の充実も同様に大切になるのではないかな。

- ・進学先に県が進めているインクルーシブ教育実践推進校を希望している生徒も多く、教育課程のつなぎ等も検討していく必要があるのではないかな。

（３）研修について

- ・特別支援学級の担任に、新採用の教員、臨時採用の教員が多い実態がある。手厚い支援が必要な生徒へは、経験豊富なベテランの教員が対応する。手厚い支援が必要でない生徒の場合は、支援が少なくて済むととらえられて、特別支援学級での経験が少ない教員が担任しているケースが多いのではないかな。専門性の問題も大いに関係してくるのではないかなと危惧している。喫緊の課題として研修の充実を図る必要があるのではないかな。

（４）交流及び共同学習にかかる決定について

- ・交流及び共同学習を行うよりも自分のペースで学べた方が成長する生徒もいる。生徒の実態により、適切な方法を選択していく必要があるのではないかな。

- ・特別支援学級の担任、生徒本人、保護者、通常の学級の担任で話し合っ、交流及び共同学習の実施について、検討している。この仕組みについて、ケースを見て、丁寧に調査していく必要があるのではないかな。

- ・交流及び共同学習にかかる決定方法について、調査していく必要があるのではないかな。例えば、子どもの利益を優先に考える仕組みづくりが必要であり、このような仕組みをとっている事例があれば、情報を収集し、詳細に分析する必要がある。条件として、その子どもの力量を見定めること、交流学級の受け入れ体制を見定めることがあるのではないかな。

- ・中学校の交流及び共同学習では、比較的、通常の学級に適応している生徒もいる。むしろ、通常の学級に在籍している生徒の中にも支援が必要な生徒もいる。つまり、通常の学級においても、その子なりの学びを大事にすることが必要なのではないかな。

（５）評価について

- ・中学校の場合、交流及び共同学習で学んだ教科の定期テストを受ける生徒もいるが受けない生徒もいる。評価やその活用について、実態を把握する必要があるのではないかな。

（６）学校の体制について

- ・特別支援教育コーディネーターの活用が学校により異なるのではないかな。
- ・特別支援学級の担任は、体制上、自閉症・情緒障害学級と知的障害学級等の障害種別の

隔てなく指導にあたっている現状もあるのではないか。自閉症・情緒障害学級に在籍する生徒と知的障害学級に在籍する生徒が混在したグループによる学習もあるのではないか。グループ学習については、国語や数学などの教科で少人数グループを編成し、個々の特性や能力に応じた課題学習に取り組んでいるケースもある。グループを編成する際は、知的障害学級の生徒、自閉症・情緒障害学級の生徒を意図的に分けるかどうかについては学級の状況や生徒同士、あるいは、教員と生徒の相性等、人間関係的な要素でグループ編成をすることも多いのではないか。

- ・人間関係の課題で交流及び共同学習ができない生徒も多く、学校の体制として、通常の学級の落ち着いた学級環境が必要となるのではないか。交流及び共同学習が充実したものになるか否かは、受け入れる交流学級の雰囲気や交流学級担任と特別支援学級生徒との関わり・関係性が重要になってくるのではないか。

- ・交流学級の担任が自分のクラスの一員であるとの認識で特別支援学級の生徒と関わっていくことが大切になってくるのではないか。

- ・学校体制として、特別支援学級の生徒も全職員で指導していくことが必要ではないか。また、特別支援学級担任が特別支援学級生徒のサポート等で交流学級について行った際、通常の学級に在籍する支援が必要な生徒にどのような関りをしていくかなども重要になってくるのではないか。

4. 横須賀市における交流及び共同学習の現状と課題の事前整理のまとめ

教育課程について、前年度を踏襲する傾向が強く、生徒一人一人の学びについて考えた時に、生徒のためになっているかといった視点が薄いのではないかという危惧がある。交流及び共同学習の実態を調べるにあたって、ケースを丁寧にみていく必要がある。

また、特別支援学級では、1対1での学習、少人数グループでの学習等の体制がある。日課表の組み方が複雑で、困っている現場が多いのではないかと考えられる。

進路について、生徒の進学先や将来の生活を考えた時、交流及び共同学習の充実が大切となるが、生徒本人が自分と周囲との違いを自覚する等、自己理解を深め、周囲の助言や支援に素直に応じられるスキルを身に付ける指導の充実も同様に大切になるのではないかと考えられる。

また、進学先に県が進めているインクルーシブ教育実践推進校を希望している生徒も多く、教育課程のつなぎ等も検討していく必要があるのではないかと考えられる。

研修について、特別支援学級の担任に、新採用の教員、臨時採用の教員が多い実態がある。交流及び共同学習の充実には、専門性の問題も大いに関係してくるのではないかと考えられる。

交流及び共同学習にかかる決定について、横須賀市では、特別支援学級の担任、生徒本人、保護者、通常の学級の担任で話し合っ、交流及び共同学習の実施について、検討している。この仕組みについて、ケースを丁寧に調査していく必要があるのではないかと考えられる。

評価について、中学校の場合、交流及び共同学習で学んだ教科の定期テストを受ける生徒もいるが、受けない生徒もいる。評価やその活用について、実態を把握する必要がある

のではないかと考えられる。

学校の体制について、特別支援教育コーディネーターの活用が学校により異なるのではないかと考えられる。

人間関係の課題で交流及び共同学習ができない生徒も多く、学校の体制として、通常の学級の落ち着いた学級環境が必要となるのではないかと考えられる。

特別支援学級の生徒を全職員で指導していくことが必要ではないかと考えられる。また、特別支援学級担任が特別支援学級生徒のサポート等で交流学級について行った際、通常の学級に在籍する支援が必要な生徒にどのような関りをしていくかなども重要になってくるのではないかと考えられる。

通常の学級と特別支援学級の学級経営の面、学校経営の面の課題が、交流及び共同学習に大きく関連していると考えられた。

この点を含めた質問紙調査、インタビュー調査の調査項目が必要であると考えた。

特別支援学級の担任に、新採用の教員、臨時採用の教員が多い実態があることから、調査の結果を基に、各学校において、交流及び共同学習の充実を図れるような研修等が実施できるようにしていく必要がある。

IV. 質問紙調査

1. 質問紙調査の目的

横須賀市の中学校における交流及び共同学習に関する現状と工夫点について明らかにすることを目的とした。

2. 質問紙調査の方法

横須賀市の全ての中学校 23 校において、リーダー的役割を担っている特別支援学級担任 23 名を対象に質問紙調査を行った。

質問紙調査では、横須賀市全 23 校の中学校特別支援学級における交流及び共同学習の実態を明らかにするとともに、各校の交流及び共同学習の現状から見えてきた課題を分析し、交流及び共同学習を充実させていくための具体的方策について事例を収集した。

3. 質問紙の内容

上述の交流及び共同学習の現状と課題の整理を踏まえ、以下のような質問紙の項目を設定した。質問項目の詳細は、章末の資料 1 を参照いただきたい。

- (1) 交流及び共同学習の成果（交流及び共同学習の授業による成果）
- (2) 交流及び共同学習の工夫点（特別支援学級の生徒へのサポート体制）
- (3) 交流及び共同学習の工夫点（校内で定期的に行われている支援会議のメンバーや内

容)

- (4) 交流及び共同学習の工夫点 (校内支援体制における特別支援学級の実態)
- (5) 交流及び共同学習の工夫点 (自由記述)
- (6) 交流及び共同学習の課題 (生徒自身の課題)
- (7) 交流及び共同学習の課題 (教員や学校体制の課題)

4. 質問紙調査の結果

質問紙調査について、23校すべての中学校から回答を得ることができた(回収率 100%)。以下に、各項目の結果を記す。なお、得られた意見に付記したアルファベットは、中学校を指している。学校名が特定できないようにした。

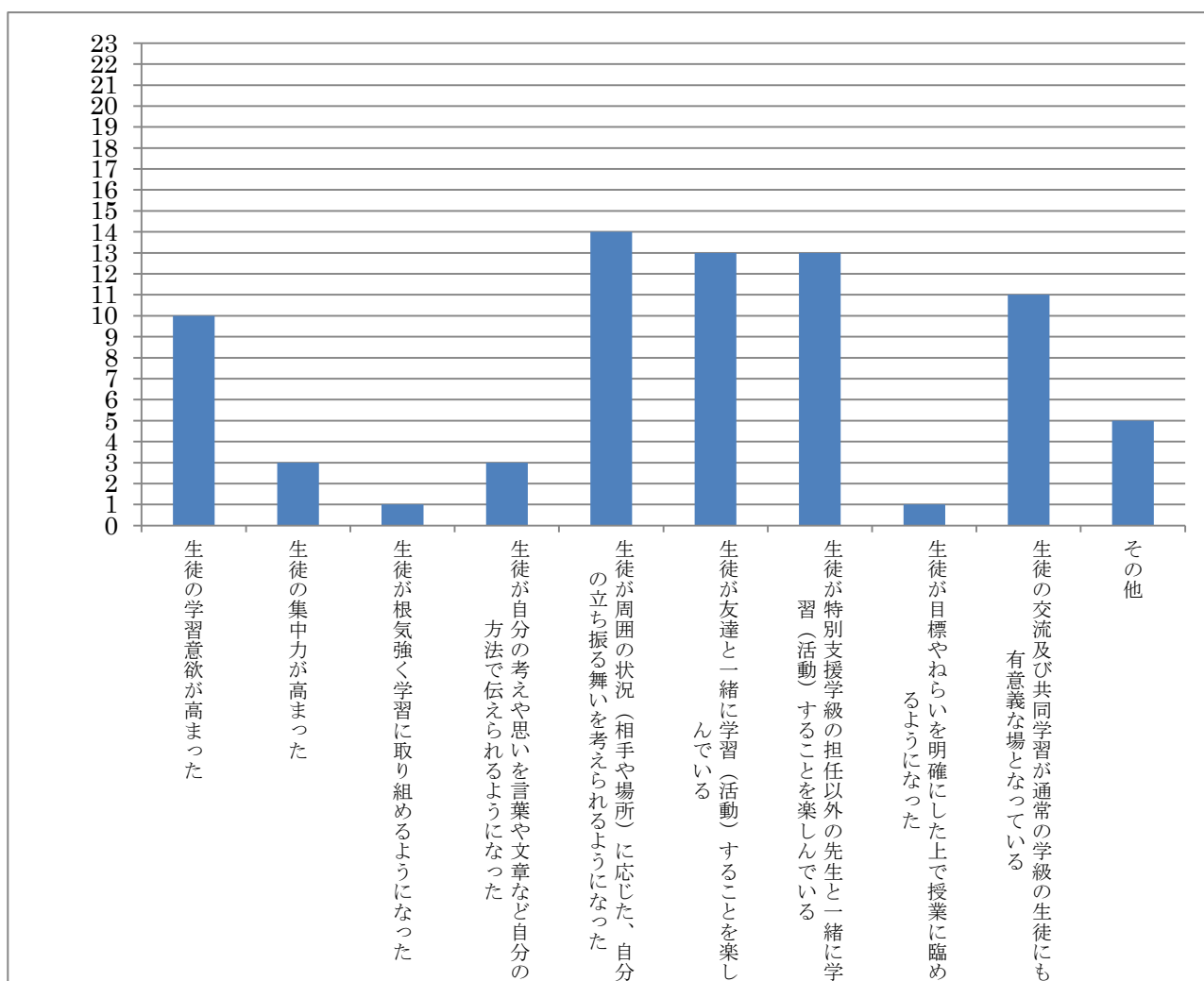
(1) 交流及び共同学習の成果 (交流及び共同学習の授業による成果)

交流及び共同学習の授業による成果について、複数回答で尋ねたところ、図 5-1 のように、最も回答が多かったのは、「生徒が周囲の状況 (相手や場所) に応じた、自分の立ち振る舞いを考えられるようになった」で 14 校であった。次に、「生徒が友達と一緒に学習 (活動) することを楽しんでいる」、「生徒が特別支援学級の担任以外の先生と一緒に学習 (活動) することを楽しんでいる」が 13 校、「生徒の交流及び共同学習が通常の学級の生徒にも有意義な場となっている」が 11 校、「生徒の学習意欲が高まった」が 10 校の順であった。

一方で、「生徒の集中力が高まった。」、「生徒が自分の考えや思いを言葉や文章など自分の方法で伝えられるようになった。」が 3 校、「生徒が目標やねらいを明確にした上で授業に臨めるようになった。」、「生徒が根気よく学習に取り組めるようになった。」が 1 校であった。

その他として、以下のような意見があった。

- ・体力の向上、専門的な知識・技術の獲得。(A)
- ・その生徒によって交流学习で得られるものは変わってくると感じた。有意義になる場合と、本人の負担や辛さにつながってしまうこともあるので、本人の特性や気持ちに寄り添って対応を考えていくべきだと感じた。(C)
- ・教科専門の授業を受けることができる。(D)
- ・「自分の考えや思いを言葉や文章など自分の方法で伝えられるようになった」の項目については、特に 3 年生ができるようになった。「生徒が友達と一緒に学習 (活動) することを楽しんでいる」の項目については、交流学級の生徒たちも積極的に声掛けや働きかけをしてくれ、関わりを持とうとしてくれているので、お互いに良い関係性となり、有意義な場となっている。(E)
- ・生徒の実態によって全く異なるので、どちらともいえないことが多い。(F)



n=23

図 5-1 成果（交流及び共同学習の授業による成果）

（２）交流及び共同学習の工夫点（特別支援学級の生徒へのサポート体制）

交流及び共同学習の際の特別支援学級の生徒へのサポート体制について、複数回答で尋ねたところ、図 5-2 のように、最も回答が多かったのは、「交流及び共同学習が取り組みやすい学校体制である」で 14 校あった。次に、「介助員が生徒の対応に慣れている」が 12 校、「困った場面で同輩・先輩に相談できる」が 8 校の順であった。

一方で、「教員や介助員の人手が足りている」が 4 校、「各教科担任が特別支援学級生徒のねらいを達成させるための手立てを講じている」が 2 校、「各教科担任が特別支援学級生徒のねらいを明確にした上で授業を行っている」が 1 校であった。

その他として、以下のような意見があった。

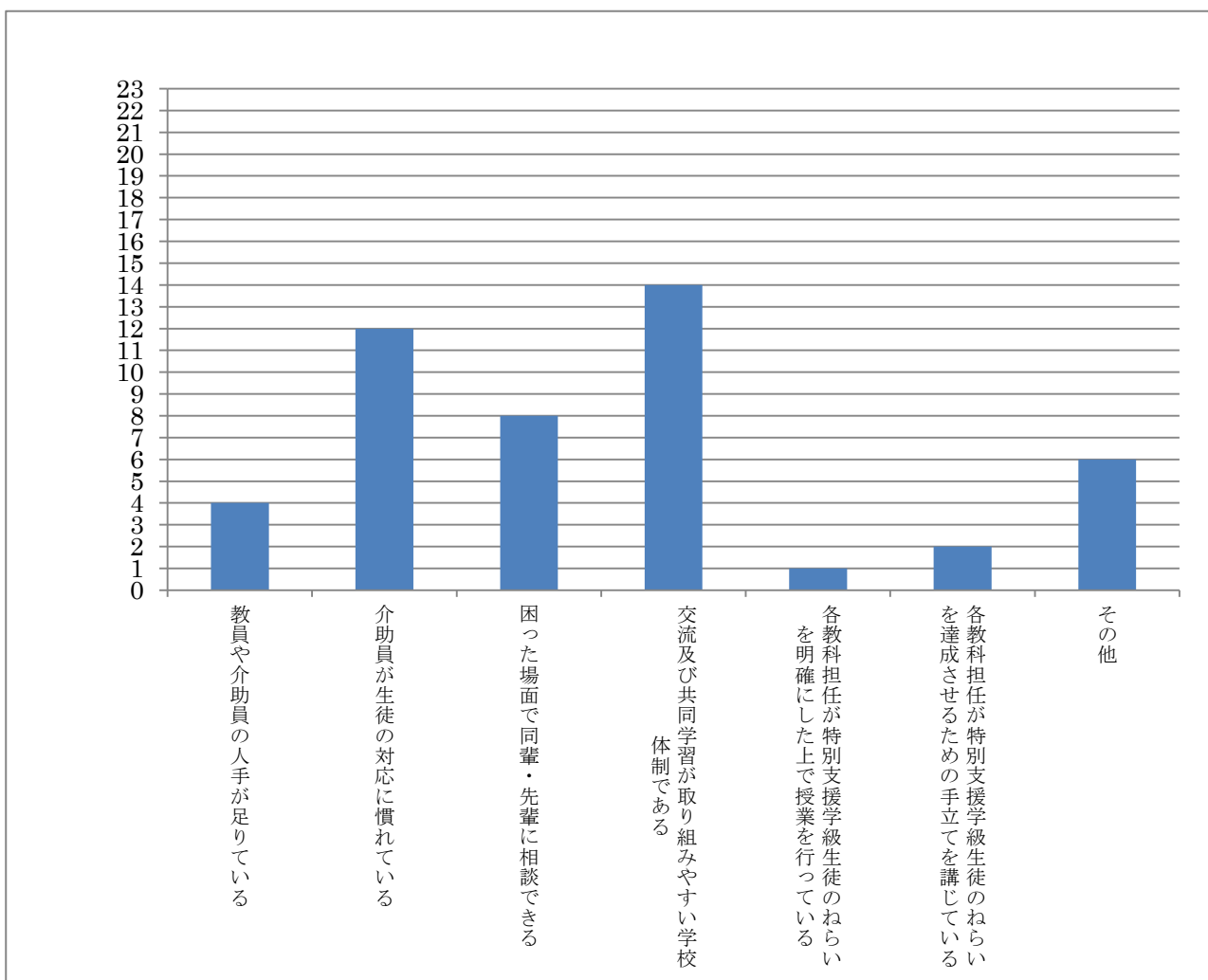
- ・各教科担任が特別支援学級生徒のことを気にかけてくれることが多い。交流学級で受けられなかった小テストを特別支援学級まで来て、行ってくれることもある。（A）
- ・交流に積極的に行かせたい思いはあるが、特別支援学級の教員の数が足りなかったり、交流学級の教師の大きな負担になってしまったりする場合があるため、学校の教員の人数が増えない限り、通常の学級で支援が必要な生徒のフォローや特別支援学級からの交

流生徒の対応は難しいと感じる。(C)

- ・ 介助員や支援担当者が、特別支援学級担任の気づかない部分にも気づき、情報共有できるので、とても手厚くサポートできている。(E)
- ・ 教科担任によって差があるので、全教科担任が特別支援学級の生徒のねらいや目標を意識しているとは言えない。クラスには他に配慮が必要な生徒も多いが、ユニバーサルデザインや合理的配慮も意識して授業している教科とあまり意識されていない教科もある。支援会議や職員会議等で連携が取れるよう働きかけはしているが、十分とは言えないので、もっと周知できるような工夫が必要。今年度に限っては、職員の加配や介助員が見つかったので、生徒の実態に合わせてほぼ職員や介助員を配置することができている。

(F)

- ・ 介助員や教員の人数が足りていない状態です。(G)



n=23

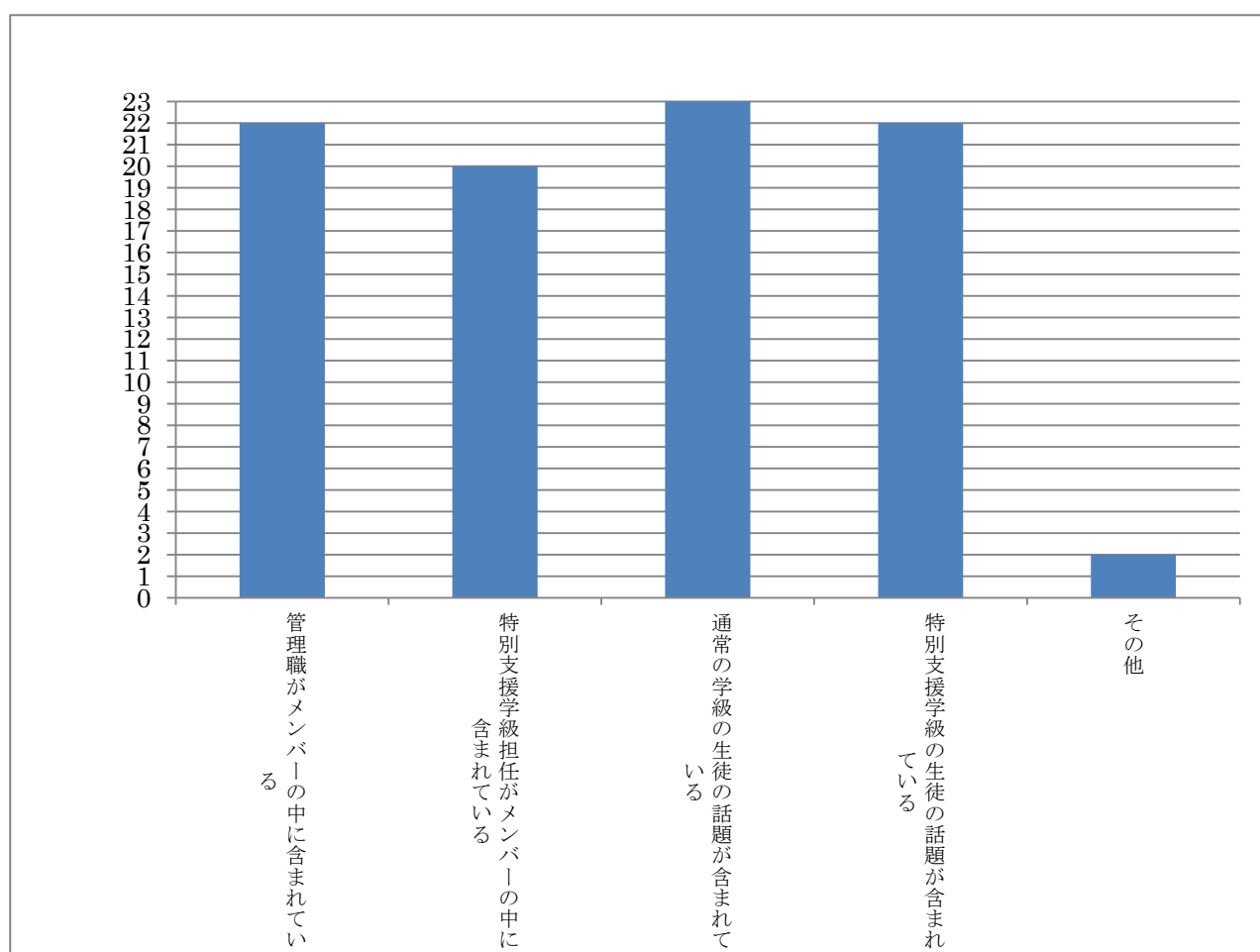
図 5-2 交流及び共同学習の工夫点（特別支援学級の生徒へのサポート体制）

（３）交流及び共同学習の工夫点（校内で定期的に行われている支援会議のメンバーや内容）

校内で定期的に行われている支援会議のメンバーや内容について、複数回答で尋ねたところ、図５－３のように「通常の学級の生徒の話題が含まれている。」が 23 校、「特別支援学級の担任や管理職がメンバーに含まれている。」「特別支援学級の生徒の話題が含まれている」が 22 校、「特別支援学級担任がメンバーの中に含まれている」が 20 校あった。

その他として、以下のような意見があった。

- ・スクールカウンセラー、登校支援相談員、養護教諭もメンバー。（Ａ）
- ・今年度、支援コーディネーターが特別支援学級担任のため、自動的に支援会議のメンバーに入っている。普段は、特別支援学級担任は支援会議のメンバーではない。（Ｄ）



n=23

図５－３ 交流及び共同学習の工夫点（校内で定期的に行われている支援会議のメンバーや内容）

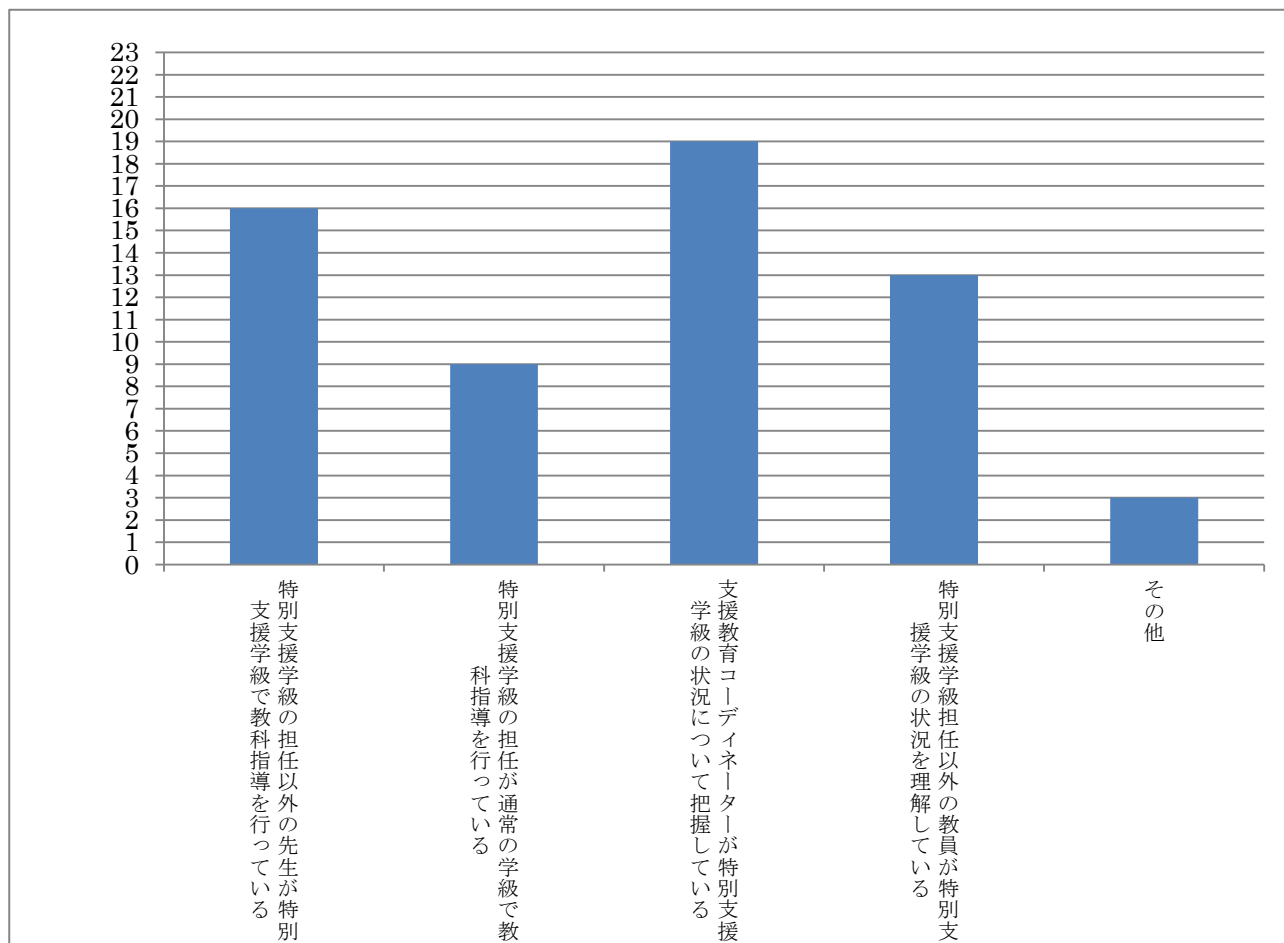
（４）交流及び共同学習の工夫点（校内支援体制における特別支援学級の実態）

校内支援体制における特別支援学級の実態について、複数回答で尋ねたところ、図５－４のように、最も回答が多かったのは、「支援教育コーディネーターが特別支援学級の状

況について把握している」が 19 校あった。次に、「特別支援学級の担任以外の先生が特別支援学級で教科指導を行っている」が 16 校、「特別支援学級担任以外の教員が特別支援学級の状況を理解している」が 12 校、「特別支援学級の担任が通常の学級で教科指導を行っている」が 9 校の順であった。

その他として、以下のような意見があった。

- ・特別支援学級担任以外では、A L T が週 1 回授業を行っている。今年度、支援コーディネーターは特別支援学級担任。（D）
- ・「特別支援学級担任以外の教員が特別支援学級の状況を理解している」の項目については、学年会等で情報交換をしているが、学年を超えての状況理解に少し課題が残っている。（E）
- ・最後の項目については学年によって差があるが、交流学級の担任やその学年の学年主任が状況を理解している。（F）



n=23

図 5-4 交流及び共同学習の工夫点（校内支援体制における特別支援学級の実態）

（５）交流及び共同学習の工夫点（自由記述）

- ・年度当初の職員会議で、特別支援学級全生徒の特徴、交流教科等を伝えている。保護者の了解を得た上で、交流学級で生徒の特徴や困った時に支援してほしい内容を伝えている。

る。交流体育に参加しやすいよう、特別支援学級の体育で、交流体育と同じ種目を行う時がある。（A）

- ・ 日程や授業場所などを事前に伝えるようにしている。（H）
- ・ 本年度から「開かれた支援級」をテーマにいろいろな活動をスタートした。教員同士の連携を密にするため、また、生徒・保護者への支援のため、週に1度の取り出し授業、生徒個人の教科ファイル、特別支援学級担任以外の教員が特別支援学級の教科指導、そして、交流学級担任との情報交換ノートを活用しながら日々活動している。（B）
- ・ 授業の単元によって、特に必要な場合は、教科担当の教員と打ち合わせをして、できる限り交流授業に付き添うようにしている。（I）
- ・ 6月から3ヶ月間は、特別支援学級生徒が交流する体育以外の全教科にサポートにつき様子を見た。9月からは交流する特別支援学級生徒が希望する教科サポートに入るようにした。サポートには特別支援学級担任、教育支援介助員、「支援応援」として特別支援学級以外の教員のいずれかが入っている。「支援応援」として、様々な教員が支援に携わることで、学校全体の支援に対する意識を向上させる狙いもある。交流学級においてのサポートは、特別支援学級生徒が中心ではあるが、通常の学級で支援が必要な生徒にも声を掛けるよう、心掛けている。（J）
- ・ 職員会議、学年会、支援会議で特別支援学級生徒の状況報告をしている。（D）
- ・ 特別支援学級生徒が参加している交流教科の教科担任と定期的に授業での様子や学習進度を確認しながら交流を行っている。また、定期的に特別支援学級の教員も授業を見に行きながら支援を行っている。（K）
- ・ 定期テスト前など限定的ではあるが、教科担任による特別支援学級生徒への学習相談や補助プリントを作成している。三者面談に交流学級担任が参加している。（L）
- ・ 交流学級で学んでいない教科を中心に、特別支援学級で学習できるように工夫して時間割を作成している。交流学級で学んだ内容の復習や予習ができる場になるような時間割にしている。（E）
- ・ 年度当初の職員会議で特別支援学級の生徒の実態や交流の仕方、配慮の必要な点などを提案している。毎月の職員会議で特別支援学級の生徒の様子や今後の見通し、活動予定等を提案している。学年会で生徒の様子や保護者の要望・今後の見通し、配慮や協力をお願い等を伝えている。教科交流の教科担任と生徒の状況等の情報共有を図るようにしている。支援会議で特別支援学級の生徒の状況や今後の見通し等を伝えている。（F）
- ・ 特別支援学級の状況を学年会や支援会議、または、職員会議で伝えている。教科交流について教科担任と支援級担任で連絡を取り合っている。

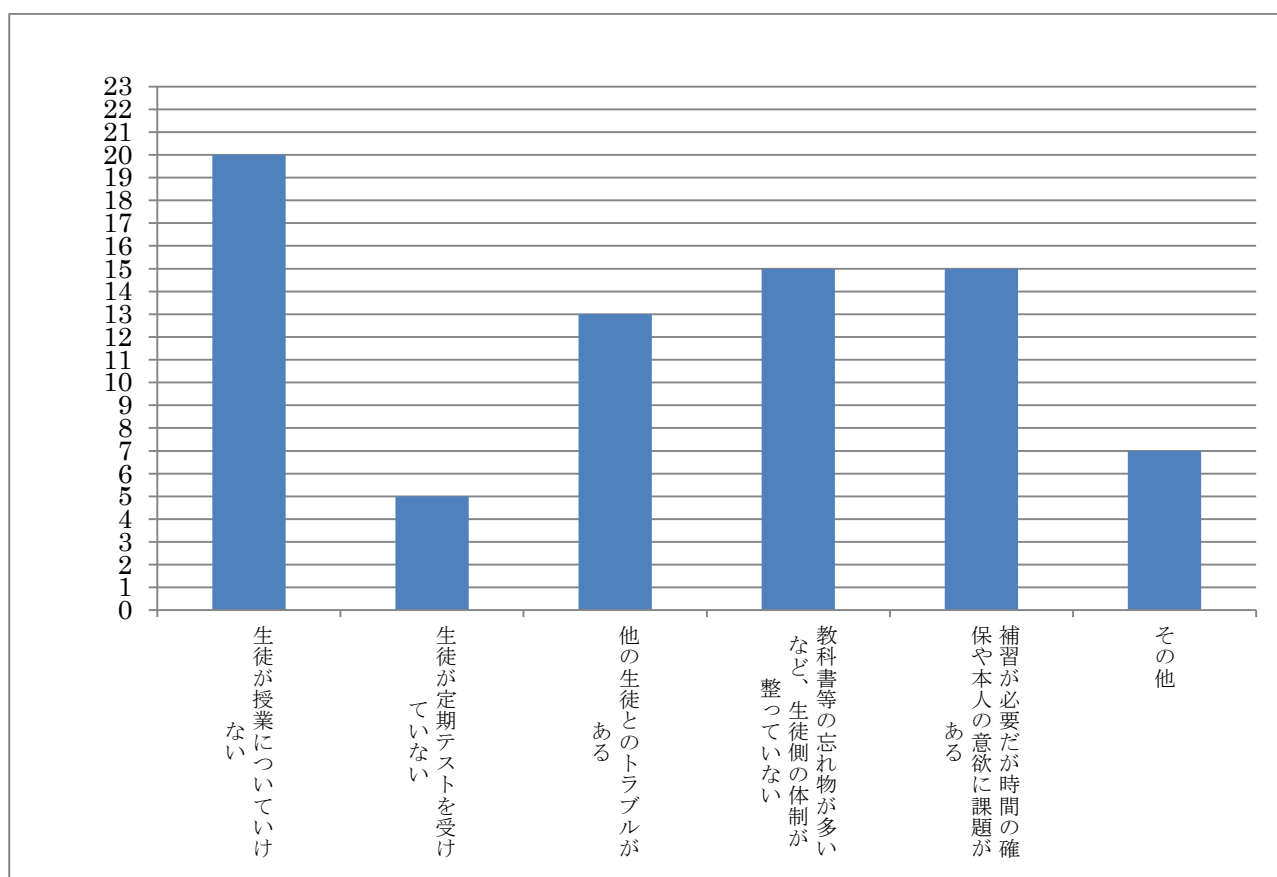
（6）交流及び共同学習の課題（生徒自身の課題）

生徒自身の課題だと感じていることについて、複数回答で尋ねたところ、図5-5のように、最も回答が多かったのは、「生徒が授業についていけない」で20校あった。次に、「教科書等の忘れ物が多いなど、生徒側の体制が整っていない」、「補習が必要だが時間の確保や本人の意欲に課題がある」が15校、「他の生徒とのトラブルがある」が13校の順であった。

一方で、「生徒が定期テストを受けていない」が5校であった。

その他として、以下のような意見があった。

- ・交流希望だが、緊張から授業クラスに入れない状況の生徒がいる。（A）
- ・授業に参加したい気持ちはあるが、内容に興味がないとやる気をなくし、態度が悪くなったりすることがある。授業に参加する態度が改善されなければ、保護者と本人と話を
して、交流は取りやめる。（M）
- ・提出物などの忘れ物が多い状況があるが、「生徒個人の教科ファイル」を作ったことで、
保護者との連絡もスムーズになり、課題も少しずつ改善された。（B）
- ・保護者の願いや本人の意思が一致していないことがあり、交流に行く準備ができていな
いことがある。本人の課題に見合った交流が行われていないことが多々ある。（K）
- ・生徒によって異なる。全教科交流している生徒（療育手帳取得に該当しない生徒）は、
ほぼ授業についていけている。療育手帳のある生徒は、同学年の授業内容の理解は難し
い。他の生徒とのトラブルもほとんどない生徒もいれば、小学校時代から、その言動に
よってトラブルを引き起こす生徒もいる。（F）
- ・交流を「させられている」意識になってしまう。（N）



n=23

図 5-5 交流及び共同学習の課題（生徒自身の課題）

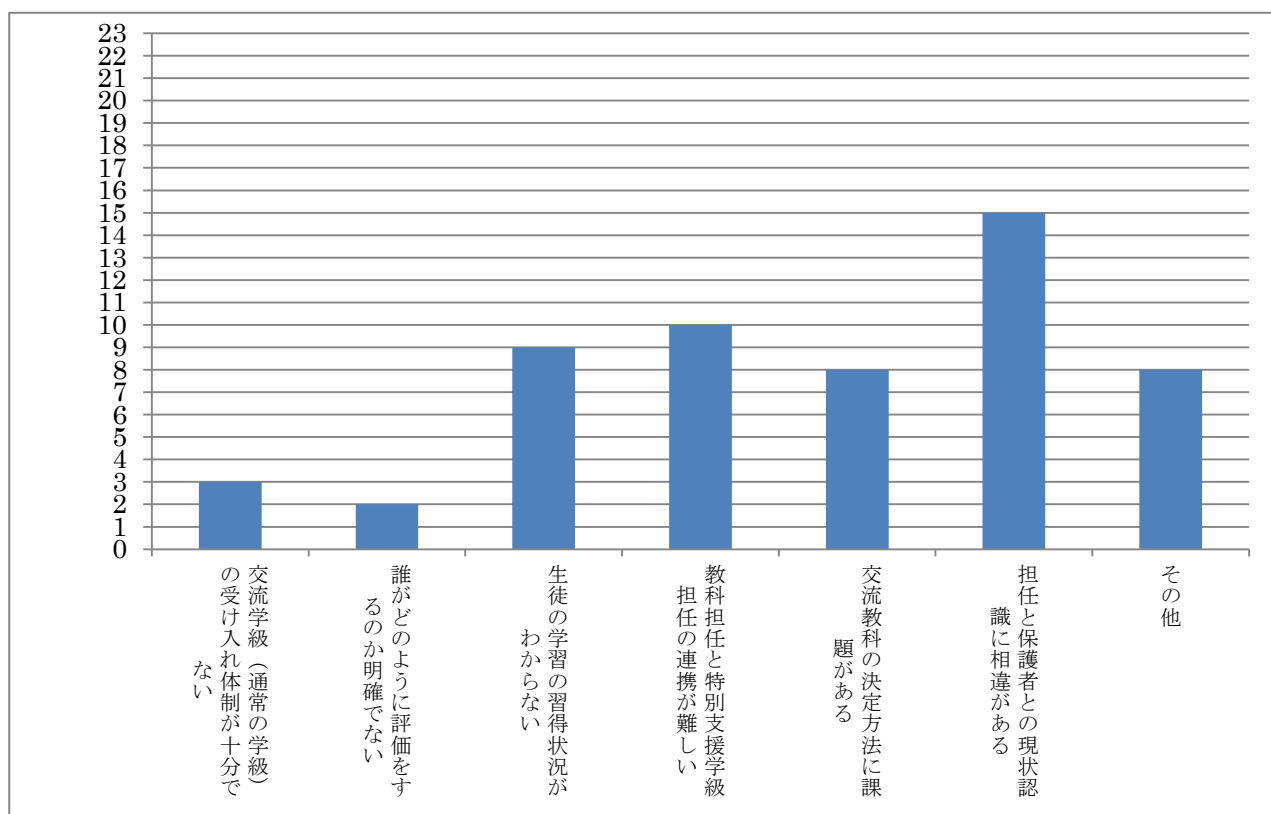
（７）交流及び共同学習の課題（教員や学校体制の課題）

教員や学校体制の課題だと感じていることについて、複数回答で尋ねたところ、図 5－6 のように、最も回答が多かったのは、「担任と保護者との現状認識に相違がある」で 15 校あった。次に、「教科担任と特別支援学級担任の連携が難しい」が 10 校、「生徒の学習の習得状況がわからない」が 9 校、「交流教科の決定方法に課題がある」が 8 校の順であった。

一方で、「交流学級（通常の学級）の受け入れ体制が十分でない」が 3 校、「誰がどのように評価をするのか明確でない」が 2 校あった。

その他として、以下のような意見があった。

- ・教科の授業ではなくて、総合や行事の取組で交流に行く場合、集団の中に入るのが苦手で、特別支援学級の中でもみんなと一緒にできないことがある生徒に対して、その日にならなければ行けるかどうかわからない状況を理解してくれない担任がいる。（M）
- ・人数が不足していて交流学习へ参加するための十分なサポートができていない。専門的な知識が乏しく、支援方法がわからないことがある。交流学級の T2 の入り方について、事前の打ち合わせや誰にどこまでサポートするか打ち合わせができていない。（O）
- ・交流学級担任との情報交換ノート、生徒個人の教科ファイルを始めたことで状況などを理解することができた。（B）
- ・交流授業が多数ある生徒が多く在籍しており、自立に向けての学習を特別支援学級で継続して行うことが難しい。また、全教科交流の生徒も複数おり、特別支援学級としての対応がなかなかできない。都度、自立に向けての声掛けや指導を行っているが、なかなか浸透させづらい。（K）
- ・教科の先生に、特別支援学級で授業をするシステムが確立できていない。（P）
- ・「生徒の学習の習得状況がわからない」の項目については、特別支援学級担任と教科担任との情報共有の場をより一層設ける必要がある。（E）
- ・途中転籍の生徒が多いので、保護者の特別支援学級の状況や支援体制に対する認識にずれがある。特に、進路指導については、特別支援学級担任だけでなく、学年体制として指導ができるようにしたい。（F）
- ・他校（近隣校）の実態がわからず、教科の決め方・時間数・参加体制等が適切なのかどうか判断が難しい。（N）



n=23

図 5 - 6 交流及び共同学習の課題（教員や学校体制の課題）

5. 質問紙調査のまとめ

（１）交流及び共同学習の成果

交流及び共同学習の授業による成果について、最も回答が多かったのは、「生徒が周囲の状況（相手や場所）に応じた、自分の立ち振る舞いを考えられるようになった」であったが、約半数の学校に止まっている。

一方で、「生徒の集中力が高まった。」、「生徒が自分の考えや思いを言葉や文章など自分の方法で伝えられるようになった。」、「生徒が目標やねらいを明確にした上で授業に臨めるようになった。」、「生徒が根気よく学習に取り組めるようになった。」については、ほとんどの学校で成果としては、挙げていない。

その他の意見も加味すると、成果は生徒によって異なっていることが、この結果に結びついたとも考えられるが、交流及び共同学習の成果は、有意義になる場合と、本人の負担や辛さにつながってしまう場合があるため、丁寧に事例を見ていく必要があるのではないかと考えた。

（２）交流及び共同学習の工夫点（サポート体制）

交流及び共同学習の際の特別支援学級の生徒へのサポート体制について、最も回答が多かったのは、「交流及び共同学習が取り組みやすい学校体制である」であったが、約半数

の学校に止まっている。

一方で、「教員や介助員の人手が足りている」、「各教科担任が特別支援学級生徒のねらいを達成させるための手立てを講じている」、「各教科担任が特別支援学級生徒のねらいを明確にした上で授業を行っている」については、ほとんどの学校でサポート体制としてできていることとしては、挙げていない。

その他の意見も加味すると、交流及び共同学習の実態として、特別支援学級の教員の数が足りなかったり、交流学級の教員の大きな負担になってしまったりする場合があることがうかがえた。

また、中学校は、教科担任制であることも関連し、全教科担任が特別支援学級の生徒のねらいや目標を意識しているとは言えない状況であり、各教科担任が特別支援学級生徒のねらいや手立てを明確にした上で授業を行うことが難しい状況であることがうかがえた。

（３）交流及び共同学習の工夫点（支援会議）

校内で定期的に行われている支援会議のメンバーや内容について、「通常の学級の生徒の話題が含まれている。」、「特別支援学級の担任や管理職がメンバーに含まれている。」、「特別支援学級の生徒の話題が含まれている」、「特別支援学級担任がメンバーの中に含まれている」と回答した学校がほとんどであった。

その他の意見も加味すると、校内で定期的に行われている支援会議のメンバーや内容について、横須賀市では、体制は整っていることがうかがえた。

この点を踏まえると、この項目以外の課題点を解決するためには、現在の体制では十分でなく、別の手立てが必要であることが推察される。

（４）交流及び共同学習の工夫点（実態）

校内支援体制における特別支援学級の実態について、最も回答が多かったのは、「支援教育コーディネーターが特別支援学級の状況について把握している」で、かなり多くの学校で支援教育コーディネーターが特別支援学級の状況について把握している状況が明らかになった。「特別支援学級の担任以外の先生が特別支援学級で教科指導を行っている」も約半数の学校で取り組まれている。

その他の意見も加味すると、横須賀市では、支援教育コーディネーターが中心となって、特別支援学級の状況について把握している他、特別支援学級の担任以外の教員が特別支援学級で教科指導を行ったり、状況共有をしたりするなどして、特別支援学級の担任以外の教員も状況を把握している学校があることがうかがえた。

（５）交流及び共同学習の工夫点（自由記述）

交流及び共同学習の工夫点をまとめると、次のようなことが挙げられていた。

- ・保護者の了解を得た上で、様々な場面で、交流学級で生徒の特徴や困った時に支援してほしい内容を伝えたり、打ち合わせをしたりする等の工夫がされている。（Ａ）（Ｂ）

(D) (K) (I) (F)

- ・交流学級での授業に参加しやすいように、特別支援学級でサポートするような内容の授業を行なっている。(A)
- ・特別支援学級の生徒に日程や授業場所などを事前に伝えるようにしている。(H)
- ・特別支援学級の授業のサポートに特別支援学級以外の教員も入るようにし、学校全体の支援に対する意識を向上させている。(J)
- ・交流学級においてのサポートは、特別支援学級生徒が中心ではあるが、通常の学級で支援が必要な生徒にも声を掛けるようにしている。(J)
- ・定期テスト前など限定的ではあるが、教科担任による特別支援学級生徒への学習相談や補助プリントを作成している。三者面談に交流学級担任が参加している。(L)
- ・交流学級で学んでいない教科を中心に、特別支援学級で学習できるように工夫して時間割を作成している。交流学級で学んだ内容の復習や予習ができる場になるような時間割にしている。(E)

(6) 交流及び共同学習の課題（生徒自身）

生徒自身の課題だと感じていることについて、最も回答が多かったのは、「生徒が授業についていけない」でかなり多くの学校がこの点を課題として認識していることが明らかになった。また、「教科書等の忘れ物が多いなど、生徒側の体制が整っていない」、「補習が必要だが時間の確保や本人の意欲に課題がある」が約半数の学校で課題として認識していることも明らかになった。「他の生徒とのトラブルがある」が課題である学校も一定数あることが明らかになった。

その他の意見も加味すると、多くの学校で生徒が授業についていけないといった学習の習得状況の課題があることは推察されるが、それだけでなく、緊張からクラスに入れなかったり、内容に興味がないとやる気をなくしたりすることや交流を「させられている」意識になってしまうことなど、交流及び共同学習に向かう心理的な面などの課題があることがうかがえた。

提出物などの忘れ物が多い状況に対して、生徒個人のファイルを用意するなどの工夫で、保護者との連絡もスムーズになり、課題も少しずつ改善されたと答える学校もあった。

また、保護者の願いや本人の意思が一致していないことが交流及び共同学習の課題となっているケースもあることがうかがえた。

(7) 交流及び共同学習の課題（教員・学校体制）

教員や学校体制の課題だと感じていることについて、最も回答が多かったのは、「担任と保護者との現状認識に相違がある」であり、半数を超えていた。

一方で、「交流学級（通常の学級）の受け入れ体制が十分でない」、「誰がどのように評価をするのか明確でない」については、ほとんどの学校で教員や学校体制の課題だと感じていることとしては、挙げていない。

その他の意見も加味すると、特別支援学級担任と保護者との現状認識に相違があること

について一定数の学校が課題だと感じている面があるが、交流学級（通常の学級）の受け入れ体制などは、特に課題としていない学校が多くを占めているなど、交流及び共同学習について教員間で協力している学校が多いことがうかがえた。

交流及び共同学習を実施する上で、人員の確保が必要であること、学習の習得状況の把握や支援方法を十分に理解していない場合もあることから、交流及び共同学習の充実に向けて、専門性を高めたり、打ち合わせを十分に行ったりするなどの手立てが必要であることが示された。打ち合わせを十分に行うためには、生徒個人のファイルを使うなどの取り組みがあることがわかった。

6. 質問紙調査の結果のまとめ

質問紙調査の結果をまとめると以下のようにになると考えられる。

交流及び共同学習の授業による成果について、生徒が周囲の状況（相手や場所）に応じた、自分の立ち振る舞いを考えられるようになったと考える学校が多いが、成果は生徒によって異なっており、交流及び共同学習の成果は、有意義になる場合と、本人の負担や辛さにつながってしまう場合があるため、丁寧に事例を見ていく必要がある。

交流及び共同学習の工夫点については、交流及び共同学習が取り組みやすい学校体制を構築している学校が多いものの交流及び共同学習の実態として、特別支援学級の教員の数が足りなかったり、交流学級の教員の大きな負担になってしまったりする場合があることがうかがえた。

また、全ての教科担任が特別支援学級の生徒のねらいや目標を意識しているとは言えない状況であり、各教科担任が特別支援学級生徒のねらいや手立てを明確にした上で授業を行うことが難しい状況であることがうかがえた。

校内で定期的に行われている支援会議のメンバーや内容について、横須賀市では、体制は整っていることがうかがえた。

横須賀市では、支援教育コーディネーターが中心となって、特別支援学級の状況について把握している他、特別支援学級の担任以外の教員が特別支援学級で教科指導を行ったり、状況共有をしたりするなどして、特別支援学級の担任以外の教員も状況を把握している学校があることがうかがえた。

交流及び共同学習の工夫点としては、教員間での情報共有が様々な場面で行われている。加えて、通常の学級の教員が、特別支援学級の授業を受け持ったり、交流及び共同学習の際の支援に入ったりするなどして、生徒の状況を把握できるような工夫がされている。

また、生徒への支援として、日程や授業場所などを事前に伝えるようにしたり、それを文書化して提示したりするなどの工夫や、交流学級で学んだ内容の復習や予習ができる場になるような時間割にするなどの工夫がされている。

生徒自身の課題だと感じていることについて、中学生になり、学習内容が難しくなることから、多くの学校で生徒が授業についていけないといった学習の習得状況の課題があると推察される。加えて、緊張からクラスに入れなかったり、内容に興味がないとやる気をなくしたりすることや交流を「させられている」意識になってしまうことなど、交流及び共同学習に向かう心理的な面などの課題があることがうかがえた。

また、保護者の願いや本人の意思が一致していないことが交流及び共同学習の課題となっているケースもあることがうかがえた。

交流及び共同学習を実施する上で、人員の確保が必要であること、学習の習得状況の把握をすることや支援方法を十分に理解していない場合もあることから、交流及び共同学習の充実に向けて、専門性を高めたり、打ち合わせを十分に行ったりするなどの手立てが必要であることが示された。

横須賀市では、教職員間で話し合う体制は整っているが、具体的な授業において、特別支援学級の生徒のねらいや手立てが明確になっていない現状があるものと考えられた。また、学校として、生徒が授業についていけないことや保護者との現状認識に対するズレなどの課題を認識していることがわかった。

V. インタビュー調査

1. インタビュー調査の目的

インタビュー調査では、交流及び共同学習を充実させていくための具体的方策について情報を収集する。

2. インタビュー調査の方法

質問紙調査の結果から交流及び共同学習について特徴のある取組をしている学校を抽出し、インタビュー調査の同意の得られた横須賀市の中学校（3校）を対象に、学校長及び特別支援学級担任への聞き取りを行う。

なお、中学校名は、特定できないようにするため、アルファベットで表記した。

3. インタビュー調査での質問内容

インタビュー調査での質問内容は、以下の通りである。（詳細は、章末の資料2参照）

- ①学校のプロフィール、地域の状況、生徒の状況（特別支援学級、通常の学級）
- ②特別支援学級担任について（経験年数等）
- ③特別支援学級の生徒について（小学校でも特別支援学級在籍であったか、否か、希望している進路の状況、保護者の理解、協力の状況）
- ④交流及び共同学習の実施状況
- ⑤交流及び共同学習における合理的配慮の状況
- ⑥個別の指導計画等の活用状況
- ⑦交流及び共同学習の課題と工夫点、今後の展望

4. インタビュー調査の結果

(1) A 中学校

①学校のプロフィール、地域の状況、生徒の状況

A 中学校は、生徒が約 700 名在籍する横須賀市では、大規模の中学校である。知的障害、自閉症・情緒障害等の特別支援学級が設置されている。歴史があり、地域との繋がりも深い。古くからの地区は、子どもの数が減少し、ここから通う生徒は少なくなっている。新しい地区に団地があり、多くの生徒がここから通っているが、現在は減少傾向にある。また、学校教育に理解がある家庭が多く、協力的である。

②特別支援学級担任について

特別支援学級は、特別支援学校での教職経験があるベテランの教員、特別支援学級での教職経験の長い教員、通常の学級での教職経験の長い教員など 4 名の教員と特別支援学級介助員の体制となっている。

③特別支援学級の生徒について

特別支援学級には、14 名在籍している。小学校では、通常の学級に在籍していた生徒が数名おり、ほとんどは特別支援学級に在籍していた。

これまでの卒業生の進路は、特別支援学校高等部に進学するケースがほとんどであり、公立高等学校、サポート校は年に数名程度という状況である。

保護者の理解・協力の状況としては、連絡帳にたくさん記入をしてくれる保護者もいるが、一方で、連絡が取れない方もいる。ネグレクトではないかと思うような家庭もある。家庭で課題を抱え、困っている方もいる。

④交流及び共同学習の実施状況

<実施状況>

特別支援学級の生徒全員が、朝の S H R、音楽、保健体育、H R、総合的な学習の時間、昼食（週 3 日）の時間に交流学級へ行き、交流及び共同学習を行っている。

かなり多くの教科で交流及び共同学習を行っている生徒は、1～2 名（自閉症・情緒障害学級）である。

国語、数学、英語の 3 教科で交流及び共同学習を行っている生徒は 1 名（病弱学級）。この生徒は、高等学校への受験を考えている。

知的障害学級の生徒は、交流及び共同学習の授業が少ない（音楽、体育、H R、総合的な学習の時間のみ）。学習面、技能面、体力面を考慮し、このような状況である。

<成果>

交流及び共同学習の成果として、専門性の高い教科担任から教わることができることが挙げられる。

日頃から生徒の情報交換ができていたため、緊張して交流学級では力を発揮できない生徒に対し、特別支援学級で小テストを受けさせてくれる等の対応をしてくれることもある。

学習に意欲的な生徒は、塾に通っていたり、提出物をきちんと提出したりするなど家庭の協力が大きい。

交流及び共同学習を行なっている生徒の多くに、体力の向上が見られる。保健体育の授業を特別支援学級で週3時間、交流学級で週3時間行っているため、必然的に時間数が多く体力の向上につながっている。交流授業の保健体育は運動量が多いこともある。

交流及び共同学習の授業では、“みんなと一緒に頑張りたい！”と意欲的に頑張っている。一方、特別支援学級では、甘えた様子を見せていることもある。

学校全体の雰囲気が良く、交流及び共同学習に関して理解がある。

⑤交流及び共同学習における合理的配慮の状況

個別の指導計画の中に合理的配慮の細かい記述はない。

三者面談の際に授業の様子を口頭で伝えている。口頭で保護者と情報共有している。

⑥個別の指導計画等の活用状況

4月の家庭インタビュー時に、学習面や生活面での保護者の願いを聞き取り確認している（個別の支援計画）。

個別の指導計画は、前期の始めと終わり、後期の終わりに保護者と確認している。

⑦交流及び共同学習の課題と工夫点、今後の展望

<課題>

音楽ではリコーダー、保健体育ではマット運動やランニングなど、難しい課題や苦手な活動になると参加を渋る生徒がいる。

周囲を考えない言動などの人間関係のトラブルがある。

自分のやり方を崩せないなどのこだわりの強さがあり、授業進行の妨げになる行動が見られる（例：数学の問題が解けず、教科担任が「板書だけすればいいよ」と伝えても納得ができず、次に進むことができない）。

<工夫点>

課題点があることから、日頃から教科担任と情報交換を行っている。

また、介助員用の日誌の活用を行なっている。日誌に生徒の様子を記録し、特別支援学級担任や介助員間で情報共有している。

<今後の展望>

通常の学級の生徒、通常の学級の担任、教科担任の理解を深めていくこと。“特別支援学級の生徒とどう接したらいいかわからない”という生徒や教員を少なくする。今現在も通常の学級の生徒たちは特別支援学級の生徒のことをよく見ているが、関わりの場が多くなるほど、「どうしたらいいかわからない」という声を聞くこともある。

周囲の生徒が良いサポートをしてくれているので、特別支援学級の生徒は交流及び共同学習に行くことを楽しみにしている。

支援をする教員や介助員などの大人の数が多くなると生徒同士のつながりがスムーズになる面とそうでない面もあり、バランスが難しい。

生徒本人が、自分ができないこと、サポートが必要なことを自分から発信できるように

なることが大切である。

通常の学級と特別支援学級の高い垣根を作らない。これが当たり前、これが普通だと思えることが大切である。

⑧取組のまとめ

A 中学校は、交流及び共同学習を実施することで、生徒が、みんなと一緒に学習するために頑張ろうという気持ちから頑張る様子が見られる。交流及び共同学習は、生徒が成長していくために重要な役割を担っている。特別支援学級は、安心できる場所として、生徒の気持ちを受けとめる場所として機能しているようである。

A 中学校は、学校全体として、横須賀市が掲げる支援教育の考え方を重視し、学校経営目標の柱の一つとして設定している。また、特別支援学級の生徒の授業において、通常の学級の担任が教科等の授業を担当できるよう、校長先生が自ら調整を行なっている。このことで、教科等の専門性の高い教師の授業を受けることができ、また、通常の学級の教員が特別支援学級の生徒の特徴や学習の習得状況を把握することにつながっている。

学校の教員がチームとして支援教育を担っていくことで、質の高い授業が提供できるような体制を作っている点に特徴がある。

今後、生徒間の関わりが量的にも増加していくことが推察されることから、より適切な関わりができるよう、関わりをタイミングよくサポートできるようにしたり、特別支援学級の生徒本人が支援の必要なことを具体的に伝えられるようにしたりするなど取組に繋げていきたいとの声が上がっている。

(2) B 中学校

①学校のプロフィール、地域の状況、生徒の状況

B 中学校は、生徒が約 450 名在籍する、横須賀市では中規模の中学校である。知的障害、自閉症・情緒障害の特別支援学級が設置されている。

地域とのつながりが強い。各教員に担当の地区があり、地域の方と顔馴染みの関係を築いている。6 月の地域連携防災デーでは、生徒が自分の地域で防災に関する活動を行っている。この活動は、有事の際には中学生が率先して動けるようにとのねらいもある。

A 小学校から 6 割、B、C 小学校から 2 割の生徒が進学してきている。人間関係等の課題があるために居住地学区の中学校ではなく、B 中学校への入学を希望する生徒もいるため、15～16 校の小学校から生徒が進学してきている。

また、学区内に児童養護施設があり、その施設に入所している生徒や外国につながる生徒等、支援を必要とする生徒が多く在籍している。

B 中学校では、教職員の意識を変えていくため、支援教育の視点を学校運営の根幹にしている。今年度は、特別支援学級を変えていこうと、特別支援学級担任が中心となり取組を始めた。特別支援学級と教職員の交流も深まっている。

②特別支援学級担任について

特別支援学級は、若手の教員 2 名と特別支援学級介助員の体制となっている。

③特別支援学級の生徒について

特別支援学級には、11名在籍している。小学校では、通常の学級に在籍していた生徒が数名おり、ほとんどは特別支援学級に在籍していた。

これまでの卒業生の進路は、特別支援学校高等部に進学するケースがほとんどである。公立高等学校、定時制高等学校に進学した生徒もいる。

長期欠席のため、交流及び交流学习を行っていない生徒がいる。

④交流及び共同学習の実施状況

<実施状況>

特別支援学級の生徒全員が、朝の会、昼食、学年・学校行事を最低限の交流及び共同学習の場とすることを基本としている。

インクルーシブ教育の理念のもと、インクルーシブ教育の具体化を目指すために「開かれた特別支援学級」をテーマに取り組んでいる。具体的な取組として、特別支援学級以外の教員が特別支援学級で授業を行っている。

様々な理由で教室に行くことができない相談室登校の生徒と特別支援学級の生徒が一緒に授業を行う、校外学習に一緒に行く等の関わる場を設けている。

<成果>

生徒自身の経験や活動量が増え、それぞれの「生きる力」につながっていると実感している。生徒たちの表情や雰囲気にも変化が見られた。

特別支援学級担任以外の教員との関わりが増え、専門的な授業を受けることができた。

「交流することが当たり前」になり、通常の学級の生徒も特別支援学級の生徒を温かくサポートする姿が見られるようになった。

障害の有無に関係なく一緒に学習したり、生活したりする環境が作られ、行事などの場面では、どの子が特別支援学級の生徒かわからないほど溶け込んでいる状況となっている。

⑤交流及び共同学習における合理的配慮の状況

個別支援計画や保護者の聞き取りをもとに、生徒の特性を理解して交流及び共同学習の教科を決定している。

学習支援員による3教科（国語、数学、英語）の個別学習（取り出し授業）を週に1回設けている。また、授業を巡回し、サポートに入ってもらうこともある。教育支援記録表を活用し、特別支援学級担任と交流学級担任が授業の様子を把握できるようにしている。

⑥個別の指導計画等の活用状況

入学前の小学校からの聞き取りやイエローファイル（個別支援計画）をもとに、入学後1ヶ月間で生徒を見取り、個別指導計画を作成している。個別支援計画には、保護者の要望が記載されている。

家庭インタビューで保護者に個別指導計画を確認してもらい、共通理解を図っている。その後、職員間で共有している。

三者面談時に個別指導計画をフィードバックしている。

⑦交流及び共同学習の課題と工夫点、今後の展望

<工夫点>

情報を共有するために、特別支援学級担任と交流学級担任で交換ノートを活用している。

交流及び共同学習をしている教科の提出物や持ち物等が確認できるように、個別教科ファイル（教科担任が記入）を活用している。

国語、数学、英語で個別学習を実施している。

多くの人との関わりの場を増やすために、相談室登校の生徒との交流や特別支援学級以外の担任による教科指導を行なっている。

個々の生徒の実態に合わせた、交流及び共同学習の教科の選択をしている。

<課題>

生徒の課題として、授業への意欲はあるが、集団のペースに合わせることに難しさがある。

学校側の課題として、生徒個々のねらいや実態に合った支援（指導）の定着が不十分である。

今年度取組み始めたことを次年度にどのようなにつなぎ、引き継いでいくか。特別支援学級担任が変わることも考えられるため、誰が担任になっても運営できるシステムをつくっていくことが必要である。

全教科で交流及び共同学習を行っている生徒は、通常の学級に転籍することが理想であるが、情緒面を保つ場として特別支援学級が必要な状況である。

<今後の展望>

校長が支援教育に対して理解があり、特別支援学級担任と共に積極的に取組む姿勢を示してくれたことにより、特別支援学級の改革を進めることができた。支援教育に理解、そして、経験がある人がリーダーシップを発揮することで、インクルーシブ教育の構築を目指していけると考えている。

誰が指導しても、“当たり前”として捉えられるシステムを構築することが大切である。

通常の学級の教員が、特別支援学級のフロアーに出向いて、生徒たちとコミュニケーションをとること。そこから始まると考えている。

今後は、環境面の整備として、個別学習や生徒の情緒の安定（クールダウン等）を図るための場の設定が必要である。

特別支援学級担任が支援的視点を他の教員に指導・支援し、教職員全体の支援教育に対する意識を変えていくことが必要である。

合理的配慮の意識を高めていくために、家庭連絡簿に、「配慮すべきこと」を記載してもらうことも検討していく。

⑧取組のまとめ

B中学校は、交流及び共同学習の成果として、生徒自身の経験や活動量が増え、それぞれの「生きる力」につながっており、生徒たちの表情や雰囲気にも変化が見られたとのことである。

交流及び共同学習を実施することで、特別支援学級担任以外の教員との関わりが増える

とともに、専門的な授業を受けることができた。

また、「交流することが当たり前」になり、通常の学級の生徒も温かく特別支援学級の生徒をサポートする姿が見られるようになったとのことである。

B 中学校は、学校全体として、横須賀市が掲げる支援教育の考え方を重視し、教職員の意識を変えていくため、支援教育の視点を学校運営の根幹にしている。今年度は、特別支援学級を変えていこうと、特別支援学級担任が中心となり、特別支援学級と教職員の交流を深めている。

交流及び共同学習を充実させていくための具体的な手立てとして、交流担任との情報交換ノート、生徒個人の教科ファイルを始めたことで、教科担任が生徒の状況などを理解することができるようになったり、生徒が準備物を忘れずに用意することができるようになったりと、好循環が生まれている。

(3) C 中学校

①学校のプロフィール、地域の状況、生徒の状況

C 中学校は、生徒が約 700 名在籍する、横須賀市では大規模の中学校である。知的障害、自閉症・情緒障害、肢体不自由の特別支援学級が設置されている。

学校全体は落ち着いた雰囲気の中で授業に取り組んでいる。通常の学級の生徒は、特別支援学級の生徒に対し優しく接してくれる生徒が多い。

特別支援学級の生徒たちは、みんな穏やかな表情で交流級の朝の会に参加している。クラスが特別支援学級の生徒のことを受け入れており、特別支援学級の生徒が先生や友達が嫌で交流学級に行くのを拒むことはない。特別支援学級の生徒たちは、交流及び共同学習をすることで成長していると感じる。

通常の学級の中にも、集団行動や学習面で支援を必要としている生徒がいる。

学校全体で特別支援教育に理解がある。

②特別支援学級担任について

特別支援学級は、特別支援学校での教職経験がある教員もいるが、特別支援学級での経験の浅い教員 5 名の体制となっている。

③特別支援学級の生徒について

特別支援学級には、14 名在籍している。小学校では、通常の学級に在籍していた生徒が数名おり、ほとんどは特別支援学級に在籍していた。

これまでの卒業生の進路は、特別支援学校高等部に進学するケースが多い。公立高等学校、インクルーシブ教育実践推進校に進学希望の生徒もいる。

保護者の理解、協力は得られているが、生徒と保護者の進路希望が一致していない家庭もある（生徒は高等学校への進学を望む、理想と現状が一致していないなど）。

④交流及び共同学習の実施状況

3 名の生徒が多く、多くの教科で交流及び共同学習を行っている。その生徒たちは、友達から

のサポートを受けながら、授業に参加できている。

交流学級の生徒や先生と関わることで、コミュニケーションを図り、相互理解につながっている。

交流及び共同学習を行う教科等は、保護者、本人の希望を優先し決定している。

授業の内容は理解できないが、「コミュニケーション」が目的の生徒や「集団で動くこと」を学ぶ生徒もいる。交流及び共同学習によって、特別支援学級の生徒の力を引き上げる効果があると感じている。

交流及び共同学習に、「ただ行かせる」ならできるが、交流級全体の動きをストップさせてしまうことがあるため、継続的な支援は必要であると感じている。

⑤交流及び共同学習における合理的配慮の状況

交流及び共同学習を行っている生徒に対し、放課後に学習の予習や復習を実施している。また、定期的な整理整頓の声掛けや持ち物の確認を行っている。

班のメンバーやグループ編成の配慮をしている。

多くの教科で交流及び共同学習を実施している生徒は、ファイルを活用し教科担任とコミュニケーションを図っている。

⑥個別の指導計画等の活用状況

保護者と担任で学校と家庭の状況を確認、共有し、家庭と学校で指導の方向性を一致させ、家庭と学校で同一の方法、声掛けで指導するようにしている。また、半年間の目標設定とその目標を達成させる手立て等を共有している。

個別の指導計画は、学校ごとに形式が異なり、今まで使っていたものを使用しているが、特別支援学級担任は経験が浅い教員も多いため、決まった形式があるとよいと感じている。

⑦交流及び共同学習の課題と工夫点、今後の展望

<課題>

特別支援学級担任の支援が必要な場面と、交流学級の生徒や交流学級担任とのコミュニケーションで解決していく場面とのバランスが課題である。特別支援学級担任が近くにいることで生徒同士の関わりが減ってしまう場面もある。

教員数が不足していて、必要な支援ができない。

<今後の展望>

交流学級の生徒と特別支援学級の生徒の相互理解を深める。

交流学級での特別支援学級生徒の所属意識を生徒、教員が共に強く持てる工夫。

合理的配慮については、具体的な事例を挙げることで特別支援学級担任の視点が広がるように思う。

特別支援学級の生徒は、障害児者たちの中の世界で生きていくものと思い込んでいる。特別支援学級の生徒も教員も「迷惑をかけてはいけない」という意識を持っている。

校長自らが特別支援学級の生徒たちとコミュニケーションを図り、朝、一緒にラジオ体操を行っていた時期もある。多くの教員が日常的に特別支援学級の様子を見に来て、生徒たちの成長を把握している、そんな環境が交流及び共同学習の充実につながると考えてい

る。

⑧取組のまとめ

C 中学校は、交流及び共同学習の成果として、特別支援学級の生徒について、穏やかな表情で授業に参加していること、交流学級が特別支援学級の生徒を受け入れており、特別支援学級の生徒が先生や友達が嫌で交流級に行くのを拒むことはないことから、特別支援学級の生徒たちは、交流及び共同学習をすることで成長していると実感している。

C 中学校は、学校全体として、横須賀市が掲げる支援教育の考え方を重視し、学校経営目標の柱の一つとして設定している。多くの教員が日常的に特別支援学級の様子を見に来て、生徒たちの成長を把握している状況にある。

交流及び共同学習を行っている生徒に対し、放課後に学習の予習や復習を実施する体制を取っており学習の習得状況に配慮した取組を実施している。また、定期的な整理整頓の声掛けや持ち物の確認を行っている。生徒によっては、ファイルを活用し教科担任とコミュニケーションを図るなどの工夫をしている。

5. インタビュー調査の結果のまとめ

インタビュー調査を行った学校では、交流及び共同学習の成果として、特別支援学級の生徒の成長を促せること、通常の学級の生徒においては、特別支援学級の生徒を受け入れていくことができる点が挙げられていた。このことから学校全体が落ち着いて、特別支援学級の生徒を受け入れる体制ができていることが条件として必要であることがうかがえた。

この学校全体が落ち着いて、特別支援学級の生徒を受け入れる体制ができるようになるため、インタビュー調査を行った学校では、学校長が特別支援教育を学校経営目標の柱に据え、様々な取り組みを行っている状況が明らかになった。

また、特別支援学級の生徒が交流及び共同学習を実施していく上では、学習の習得を支援したり、準備物等の情報を整理したりすること、気持ちの面でも支援をしていくことが条件として必要であることがうかがえた。

この点を解決する工夫として、教職員間の情報交換の仕組みでは、情報交換を様々な場面で行うこと、文書等に整理し、これを元に情報共有を行うような工夫が挙げられた。特に、中学校においては、教科担任制であり、教科による生徒の状況の違いもあることから教員間の情報の共有が重要であることが推察される。

加えて、生徒への支援では、授業の準備物等を文書にしてわかりやすくするような工夫が挙げられた。

これらの工夫に加えて、特別支援学級の授業において、教科等の専門性のある通常の学級の教科の教員が特別支援学級の授業を受け持つことも、教員が特別支援学級の生徒の状況を知り、手立てを検討する際にも役に立つことが挙げられた。

また、中学校においては、高等学校等への進学の間からも、交流及び共同学習の教科を選んでいくことが必要になってくることがうかがえた。

以上の工夫点を他の中学校にも広げていくことが必要である。

一方で、特徴ある取組を行なっている学校においても、特別支援学級の生徒のねらいや

合理的配慮等について、明確になっていないことが多く、この点について、課題があることがうかがえた。

Ⅵ. まとめと考察

交流及び共同学習の授業による成果について、質問紙調査では、特別支援学級の生徒が周囲の状況（相手や場所）に応じた、自分の立ち振る舞いを考えられるようになったと考える学校が比較的多かったことが挙げられる。インタビュー調査を実施した学校においても、交流及び共同学習によって、特別支援学級の生徒の成長を促すこと、通常の学級の生徒においては、特別支援学級の生徒を受け入れていくことができる点が挙げられていた。

加えて、インタビュー調査を実施した学校において、交流及び共同学習を推進していく上で、学校全体が落ち着いて、特別支援学級の生徒を交流学級で受け入れる体制ができていることが重視されていた。

インタビュー調査を行った学校は、学校全体が落ち着いて、特別支援学級の生徒を受け入れる体制を構築するため、学校長が特別支援教育を学校経営目標の柱に据え、様々な取組を行っている状況がある。このことから、学校マネジメントが重要であることが推察された。

交流及び共同学習を実施していく上では、特別支援学級の教員の数が足りず、交流学級の教員の大きな負担になってしまう場合があることがうかがえた。

横須賀市では、校内で定期的に行われている支援会議のメンバーに管理職が含まれている等、交流及び共同学習が取り組みやすい学校体制を構築している学校が多い。特別支援学級の生徒が交流及び共同学習を実施していく上では、学習の習得を支援したり、準備物等の情報を整理したりすることと併せ、心理的な面での支援も必要な条件であることがうかがえた。具体的には、授業の準備物等を文書にしてわかりやすくするような工夫が効果的であることが挙げられていた。

これらの工夫に加えて、特別支援学級の授業において、教科等の専門性のある通常の学級の教科の教員が特別支援学級の授業を受け持つことも、教員が特別支援学級の生徒の状況を知り、手立てを検討する際にも役に立つことが挙げられた。この点は、中学校に特有の状況であると考えられた。

交流及び共同学習を実施していく上で、教職員間の情報共有の仕組みでは、情報共有を様々な場面で行うこと、文書等に整理し、これを元に情報共有を行うような工夫が挙げられた。特に、中学校においては、教科担任制であり、教科による生徒の状況の違いもあることから、特に教員間の情報の共有が重要であることが推察される。

また、全教科担任が特別支援学級の生徒のねらいや目標を意識しているとは言えない状況で各教科担任が特別支援学級生徒のねらいや手立てを明確にした上で授業を行うことが難しい状況であることがうかがえた。

また、中学校においては、高等学校等への進学についても考慮し、交流及び共同学習の教科を選ぶ必要があることがうかがえた。

生徒自身の課題だと感じていることについて、中学校になり、学習内容が難しくなることから、多くの学校で生徒が授業についていけないといった学習の習得状況の課題があると推察される。加えて、緊張からクラスに入れなかったり、内容に興味がないとやる気をなくしてしまったりすること、交流を「させられている」意識になってしまうことなど、交流及び共同学習に向かう心理的な面の課題があることがうかがえた。

また、保護者の願いや本人の意思が一致していないことが交流及び共同学習の課題となっているケースもあることがうかがえた。

交流及び共同学習を実施する上で、人員の確保が必要であること、学習の習得状況の把握や支援方法を十分に理解していない場合もあることから、交流及び共同学習の充実に向けて、専門性を高めたり、打ち合わせを十分に行ったりするなどの手立てが必要であることが示された。

特徴ある取組を行なっている学校においても、特別支援学級の生徒のねらい、合理的配慮等について明確になっていないことが多く、この点について、課題があることがうかがえた。この点を解決するための手立てとして、個別の指導計画等に特別支援学級の生徒のねらいや合理的配慮等について明記し、それを教員間で共有することが有効であると推察されるが、明記されていない状況が明らかとなった。これは、各学校で、個別の指導計画の様式がバラバラであること、合理的配慮に関する枠が設けられていないこと、生徒のねらいが大雑把であることが課題としてであると推察される。

このことへの対応が、今後の横須賀市に求められているものと考えられる。今後、交流及び共同学習の充実を図っていく上で、特徴ある取組を行なっている学校の工夫を全ての学校にも取り組んでもらうと共に、個別の指導計画の様式を含めた書き方についても市としての指針を示すことが必要ではないかと考えるに至った。

付記

インクルーシブ教育実践推進校については、神奈川県ホームページに、以下のように説明されている（<https://www.pref.kanagawa.jp/docs/j7d/cnt/f533456/index.html>）。

『「インクルーシブ教育実践推進校」とは、誰もが大切にされ、いきいきと暮らせる「共生社会」をめざして、知的障がいのある生徒が高校で学ぶ機会をひろげながら、みんなで一緒に過ごすなかで、お互いのことをわかりあって成長していくことを目標にしている高校です。』

令和2年10月現在、神奈川県内で14校が指定されている。

（三浦千夏（令和2年度地域実践研究員）、小澤至賢）

横須賀市中学校特別支援学級を対象とした交流及び共同学習に関する質問紙調査

学校名	中学校
-----	-----

質問項目 ★該当する選択肢の□内に✓を入れてください。

I 交流及び共同学習における成果について

1 交流及び共同学習の授業による成果として、次のようなことを感じますか。（複数回答可）
成果として項目にないことは、その他にお書きください。

☐	生徒の学習意欲が高まった
☐	生徒の集中力が高まった
☐	生徒が根気強く学習に取り組めるようになった
☐	生徒が自分の考えや思いを言葉や文章など自分の方法で伝えられるようになった
☐	生徒が周囲の状況（相手や場所）に応じた、自分の立ち振る舞いを考えられるようになった
☐	生徒が友達と一緒に学習（活動）することを楽しんでいる
☐	生徒が特別支援学級の担任以外の先生と一緒に学習（活動）することを楽しんでいる
☐	生徒が目標やねらいを明確にした上で授業に臨めるようになった
☐	生徒の交流及び共同学習が通常の学級の生徒にも有意義な場となっている
☐	その他

II 交流及び共同学習の実施に向けた工夫点について

1 交流及び共同学習の際、特別支援学級の生徒へのサポート体制についてお答えください。（複数回答可）

☐	教員や介助員の人手が足りている
☐	介助員が生徒の対応に慣れている
☐	困った場面で同輩・先輩に相談できる
☐	交流及び共同学習が取り組みやすい学校体制である
☐	各教科担任が特別支援学級生徒のねらいを明確にした上で授業を行っている
☐	各教科担任が特別支援学級生徒のねらいを達成のさせるための手立てを講じている
☐	その他

2 校内で定期的に行われている支援会議のメンバーや内容についてお答えください。（複数回答可）

☐	管理職がメンバーの中に含まれている
☐	特別支援学級担任がメンバーの中に含まれている
☐	通常の学級の生徒の話題が含まれている
☐	特別支援学級の生徒の話題が含まれている
☐	その他

3 校内支援体制における特別支援学級の実態についてお答えください。(複数回答可)

☐	特別支援学級の担任以外の先生が特別支援学級で教科指導を行っている
☐	特別支援学級の担任が通常の学級で教科指導を行っている
☐	支援教育コーディネーターが特別支援学級の状況について把握している
☐	特別支援学級担任以外の教員が特別支援学級の状況を理解している
☐	その他

4 交流及び共同学習を進めるにあたり、工夫していることについてお書きください。(自由記述)

Ⅲ 交流及び共同学習の課題について

1 生徒自身の課題だと感じていることは何ですか。(複数回答可)
課題として項目にないことは、その他にお書きください。

☐	生徒が授業についていけない
☐	生徒が定期テストを受けていない
☐	他の生徒とのトラブルがある
☐	教科書等の忘れ物が多いなど、生徒側の体制が整っていない
☐	補習が必要だが時間の確保や本人の意欲に課題がある
☐	その他

2 教員や学校体制の課題だと感じていることは何ですか。(複数回答可)
課題として項目にないことは、その他にお書きください。

☐	交流学級(通常の学級)の受け入れ体制が十分でない
☐	誰がどのように評価をするのか明確でない
☐	生徒の学習の習得状況がわからない
☐	教科担任と特別支援学級担任の連携が難しい
☐	交流教科の決定方法に課題がある
☐	担任と保護者との現状認識に相違がある
☐	その他

資料 2

地域実践研究 横須賀市 交流及び共同学習 インタビュー調査 質問項目

学校名：

訪問日：

対応者：

訪問者：

学校のプロフィール、地域の状況、生徒の状況（特別支援学級、通常の学級）	
特別支援学級担任について（経験年数等）	
特別支援学級の生徒について（小学校でも特別支援学級在籍であったか、否か、希望している進路の状況、保護者の理解、協力の状況）	
交流及び共同学習の実施状況	
交流及び共同学習における合理的配慮の状況	
個別の指導計画等の活用状況	
交流及び共同学習の課題と工夫点、今後の展望	

